

僕は一生、追い続けます

霊柩車よ、永遠に……

庶民文化研究の第一人者、町田忍さんにとって

霊柩車はライフワークに値する研究対象なのだという。

町田さんの知られざる過去とともに

長年の研究成果から霊柩車のディープな世界を語ってもらった。

庶民文化研究家
町田 忍

●まちだ・しのぶ 1950年東京都生まれ。「三十坪の秘密基地」(東京・台東区)名誉館長。『東京マンガ博物館 おもしろ珍ミュージアム案内』(メイツ出版)など著作多数。BSフジで「町田忍の昭和レトロ紀行」放映中。小誌に「なんだこりゃ!?! 写真館」連載中。

唐破風^{から}に導かれて

——そもそも霊柩車に興味を持ったきっかけは何だったのでしょうか？

三十年くらい前に、銭湯に興味を持ち始めたのと同じくらいのタイミングで霊柩車にもハマったんですが、銭湯建築にも霊柩車にも「唐破風^{から}」がつきものでしょう？ あれが面白

くて写真に収めたり、探して歩くようになったんです。

唐破風は安土桃山時代に日本でできた建築様式です。現代風俗研究会という会で一緒にしている、数少ない霊柩車仲間の井上章一さん曰く、「唐」というのは派手さを表す言葉で、「中国の」という意味ではないんだそうです。

——町田さん以外にも霊柩車に興味

を持っている方がいたんですね。

井上さんは霊柩車研究の第一人者ですよ。

僕が霊柩車を追い始めたころは、霊柩車といえは唐破風のついた宮造りのもので、装飾がほとんどない洋型の霊柩車は、宮型^{みやがた}よりずっと少数派でした。だいたい七対三くらいで宮造りのほうが多かったです。いまは割合が逆転しています。その

辺の正確な数字は全霊協(全国霊柩自動車協会)が把握しているんじゃないかな。

僕の感覚では、昭和が終わったまさにそのころから、街で宮型を見る機会が少なくなった気がします。

昭和六十四(一九八九)年に昭和天皇が亡くなられた際は、御料車の日産プリンスロイヤルを改造した洋型の霊柩車が使われました。皇族でも秩父宮が亡くなったときなどは宮型が使われたのですが、昭和天皇の場合は宗教色を出せないということもあって、神社仏閣を連想させる宮造りの使用は控えられたのだと思います。

意外な過去が明らかに

皇室関係の行事があるときは、慶弔の区別なく、周辺警備がすごく大

変なんです。僕は一年だけですけど、皇居に近い麹町警察署にいたので、そこはよくわかるんです。

——麹町警察署！ 丸の内、本富士と並ぶ、警視庁の御三家警察署じゃないですか！

麹町署管内には皇居以外にも、国会議事堂や最高裁判所などがありますからね。普通、警察署の署長の階級は警視ですが、麹町署は規模が大きく、重要性も高いということ、署長は警視正だったんですよ。いまもそうかはわからないけど。

——警視正というのは……。

警察官の階級は、下から順に、巡查、巡査長、巡査部長、警部補、警部、警視ときて、警視正がきます。その上の警視長は何人もいません。さらにその上に警視監が二人くらいいて、トップが警視総監です。

麹町署では、東宮御所と皇居の間

を皇太子が往復するときなど、警衛^{けいゑい}——皇室の場合、警備のことを「警衛」といいます——は日常茶飯事でした。

警衛では、警察官はみな白手^{びやくて}をしなくてはなりません。白手^{びやくて}というのは、まあ軍手みたいなものです。

——そこまでいろいろなことを知っているなんて、本当に警察官だったんですね。

一年で退職ですから巡查どまりですが、実は警視総監賞をもらったこともあるんです。

——警視総監賞!? どんな手柄を立てたんですか？

警視庁内で防犯ボスターのコンクリールがあつて、それで(笑)。

——絵でももらえるとは知りませんでした。それにしても、たった一年の間に警視総監賞はすごい。

賞はいろいろと、細かくたくさん